

# 岡崎市が取り組む水辺空間を活かしたまちづくり

## Community Development Integrating Waterfront Use in the City of Okazaki

水循環・まちづくりグループ	研 究 員	阿部 充
水循環・まちづくりグループ	技 術 参 与	土屋 信行
	主席研究員	野仲 典理
河川・海岸グループ	研 究 員	酒井 宏
企画グループ		小野寺 翔

愛知県岡崎市は西三河地方を代表する都市であり、市内には南北に矢作川、東西に支川の乙川が流れ、豊かな水辺環境を形成している。特に、市街地中心部を貫流し矢作川に合流する乙川は、岡崎を代表する河川で多くの市民に親しまれている。

現在、岡崎市では、中心市街地を流れる乙川の水辺空間を活かした「かわまちづくり」に取り組んでいる。このエリアは徳川家康公が生まれた岡崎城があり、古くから江戸時代の城下町、宿場町として大いに栄え、岡崎を代表する繁華街へと発展してきたが、近年は中心市街地の空洞化が指摘されるなど、かつての賑わいを失っている状況であった。岡崎市は観光を産業の柱の一つと捉え、賑わいのある活気に満ちたまちを目指しており、まずは市の玄関にあたる乙川周辺の魅力向上のため、総合的な整備を進めている状況である。本稿では、岡崎市の中心市街地のかわまちづくりの取り組みについて紹介する。

**キーワード：かわまちづくり、乙川、水辺空間、中心市街地、歴史、文化**

Okazaki City, Aichi prefecture, is a representative city in western Mikawa region, with Yahagi River running north-south and its tributary Otsu River flowing east-west, making the city a waterfront-rich environment. Particularly, the Otsu River, after running through the heart of the city, merging with the Yahagi River, is well liked by the people in Okazaki, making it a representative river there.

Currently, Okazaki City is developing its community integrating waterfronts of the Otsu River that runs through the heart of the city. This area encompasses Okazaki Castle, in which Shogun Tokugawa Ieyasu was born and the city is well developed as a castle town in the Edo period and also as a post town, it flourished as a busy area in Okazaki. However, most recently, the city is losing its strength it used to show, making the heart of the city hollow. Okazaki is putting tourism as one of their pillars of its industry, trying to bring the strength full of prosperity. To start off, the city is face-lifting comprehensively the city entrance around Otsu River. This paper will introduce community building integrating riverfront in the center of Okazaki City.

**Keywords: community development integrating rivers, the Otsu River, waterfront space, heart of the city, history, culture**

## 1. はじめに

2020年に東京の臨海部を中心にオリンピックが開催されることになり、水辺空間への注目が高まりつつある。平成23年には河川敷地占用許可準則が改正され民間の営利事業者も河川敷地を占有することが可能になった。更に平成25年度からは水辺とまちが一体となった美しい景観と新しい賑わいを生み出すミズベリング・プロジェクトが全国で動き出し、水辺を活かしたまちづくりへのニーズが益々高まっていると言える。

そのような中で、愛知県岡崎市では、平成25年度から「乙川リバーフロント地区整備事業」と称し、市内中心部を流れる一級河川の乙川の河川空間を活かしたまちづくりに取り組んでいる。

本稿では、岡崎市の取組みを紹介しつつ、その特徴について記す。なお、乙川リバーフロント地区整備事業は平成27年度以降も継続して進行している事業である。本稿にて紹介する内容は平成26年度末時点のものであることを予めことわっておく。

## 2. 背景

### 2-1 岡崎市の位置

愛知県岡崎市は、愛知県の中央部、三河山地と岡崎平野の接点に位置する。名古屋市からは約35kmの距離にあり、市内を東西に国道1号、南北に国道248号が通っている。また、東名高速道路の岡崎インターチェンジが設置され、主要な県道も多くある。

面積は387.24平方キロメートルで愛知県内3位、人口は380,822人（2015年3月1日時点）で愛知県内4位となっている。西三河地方を代表する都市であり、中核市に指定されている。



図-1 岡崎市の位置

### 2-2 乙川リバーフロント地区

岡崎市は矢作川流域にあり、20に及ぶ多くの河川が市内を縦横に流れ、中でも、市域の西を北から南に縦断する矢作川、巴山に源を発し市域を東から西に横断する乙川は、岡崎を代表する河川である。

乙川リバーフロント地区は、その乙川を挟んで南側に位置する名鉄東岡崎駅周辺、北側に位置する岡崎城跡及び中心市街地を含む周辺地域を対象範囲としている。東岡崎駅は市内で最も利用者の多い駅であり、また市内観光の拠点ともなる箇所であり、乙川リバーフロント地区は、まさに岡崎市の玄関口にあたる。

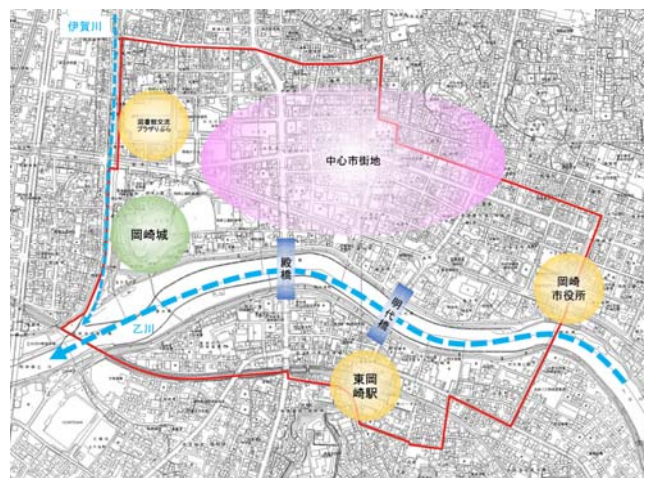


図-2 乙川リバーフロント地区の対象範囲

乙川リバーフロント地区はまた、岡崎城のお膝元となり、大変歴史のある地域である。

近年、江戸時代について、「天下泰平」とも呼ばれた平和の時代が長く続いたことや、限られた資源を有効に活用する循環型社会であったことなどにより再評価されることが多いが、その礎を築いた徳川家康公生誕の地が岡崎城である。それに由来し、岡崎城周辺は「康生町」という地名が今も残っている。



図-3 岡崎城

なお、現在の中心市街地は当時の岡崎城外堀に含まれ、平成19年には当時の外堀が発掘されている。江戸時代の岡崎城は総構と呼ばれる堀で町並みを取り囲んだ形式の城郭だった。その規模は東西1km、南北0.9kmに及び、比較的規模の大きなものであったと考えられている。江戸時代の城郭と現在の地図を重ねあわせた図を図-4に示す。

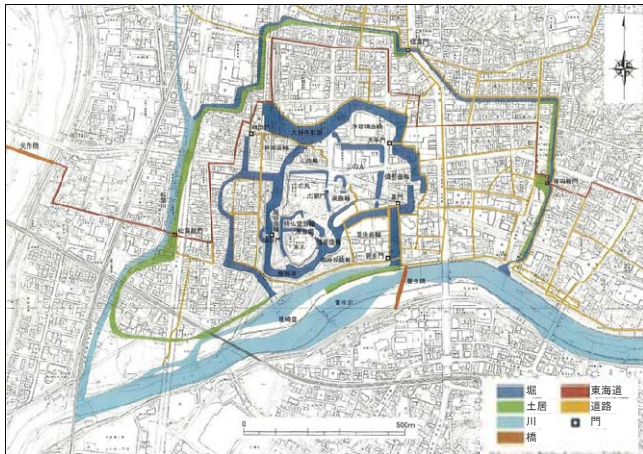


図-4 現在の地図と重ねあわせた岡崎城郭図

また、岡崎宿は東海道五十三次の宿場町でもあり、江戸から数えて三十八番目にあたる。本陣3、脇本陣3、家数1,565、旅籠112、宿場人口6,494人の規模を誇り、江戸と京都を結ぶ東海道でも、府中（駿府城下）、宮（熱田）に並ぶ第三位の規模の宿場町であった。屈折の多い、町並みの長さでも有名で、「岡崎の二十七曲り」と呼ばれ、一部は岡崎城の城内を通っていた。

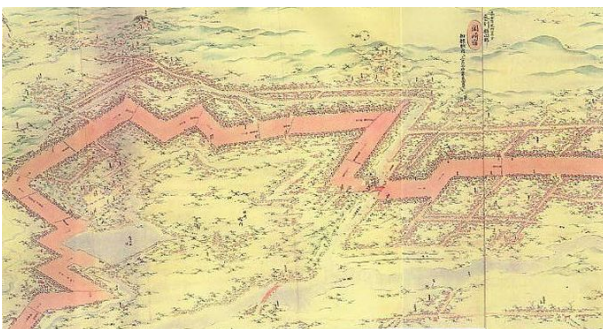


図-5 岡崎宿（分間見取絵図）

このように、対象となる区域は古くから大変な賑わいをもつ都市として発展してきたが、第二次世界大戦下の昭和20年7月20日、空襲を受け中心市街地は焼失した。当時愛知県が戦災復興事業として、約2平方キロメートルの罹災地に対して商業区域を施行地区と定め、昭和21年に着手した。この区域において、街路

の新築拡張、公園緑地の配置、宅地及び画地の適正化等の土地利用計画を高度に活用し、それと引き換えに、往時の町割りは失われてしまったと考えられる。

### 3. 取組みの経緯

ここで、乙川リバーフロント地区整備事業の取組み経緯について説明する。本地区の再生については過去にも議論されていたが、事業費確保の点や広範な関係者の合意形成の面で課題があり、具体化には至っていなかった。

このため、市長の呼びかけに応じ、平成25年4月に、市の将来ビジョンを実現するための様々な事業の構想、企画、運営を活動目的とした官民連携組織「岡崎活性化本部」が岡崎商工会議所内に設置された。その上で、「岡崎活性化本部」内に、まちづくり関係のNPO、地元商店会、観光事業者、建築家、学識者、地元タウン誌編集者、行政で構成される「乙川リバーフロント部会」が組織され、計画段階から民間の視点で当該地区のまちづくりに関する企画・検討が行われた。乙川リバーフロント部会は平成25年5月から計6回の部会を開催した。部会のほか、行政と共同で現地状況の確認、他地域の方を招いてのパネルディスカッションを行うとともに、「乙川リバーフロントアイデアコンクール」を行い、市内から広く水辺空間活用のアイデアを募集し、審査した。アイデアコンクールでは、約2,500点の絵・作文が寄せられた。これらの検討を受け、平成26年2月12日には、「乙川リバーフロント地区整備基本方針の策定に向けた提言書」を取りまとめ、市に提出した。

岡崎市においても、市長が率先して市民対話集会で説明を行い、地域住民との活発な意見交換を行っていた。これらの意見交換で得られた結果や上述の提言書の内容を踏まえ、平成26年3月28日、岡崎市は当面行政が重点的に取り組む内容について取りまとめた「乙川リバーフロント地区整備基本方針」を策定、公開した。

平成26年度に入り、地区の整備、利活用には市役所の多くの部局の連携が必要となることから、同年4月からは、市役所内の関係部局がすべて集まる「岡崎市乙川リバーフロント推進会議」を立ち上げ、それぞれの課題に取り組むこととなった。その後、基本方針の内容を具体的に検討を行い、平成26年8月には、「乙川リバーフロント地区整備計画」の公表を行った。検討の過程においては、「乙川リバーフロント部会」が発展した「乙川リバーフロント推進部会」の場においても議論が行われ、市民や民間の意見を反映する工夫が成

された。検討内容を踏まえ、平成 26 年度内に「社会資本整備総合交付金」、「かわまちづくり」支援制度」の制度を用いて、それぞれ計画提出、申請書提出を行った。平成 26 年 3 月には「かわまちづくり」支援制度に登録され、平成 27 年 4 月には社会資本整備総合交付金の内定通知を受けた。両制度の活用を推進する過程で、県や国とも意見交換を行い、協力体制が構築された。

また、平成 26 年度は、ハード整備後の利活用に向けたソフト事業に関するいくつかの社会実験が岡崎活性化本部により実施された。

## 5. 整備内容

### 5-1 事業内容

乙川リバーフロント地区で検討を進めてきた事業内容について整理した整備方針概要図を図-6 に示す。

#### (1) 新たな人道橋

乙川リバーフロント地区整備計画は、この地区を訪れた人の回遊動線を意識して策定されており、名鉄東岡崎駅のある乙川左岸地区と、岡崎公園や中心市街地などがある乙川右岸地区を結ぶ動線として新たな人道橋を整備することとした。なお、人道橋は単に回遊動線とするだけでなく、歩行者が水辺の景観を楽しめる場所とするため、高欄及び床材等の外装は岡崎市の歴史・文化にも配慮し、地元産の木材を使用したデザ

インとすることとした。また、橋上イベントなどによる利活用の可能性を広げるため、公園施設として位置づけることとした。



図-7 新人道橋イメージ

#### (2) 徳川四天王石像

徳川四天王とは、江戸泰平を築いた徳川家康を支えた三河武士の代表格である酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政の 4 人の武将を顕彰した呼称である。岡崎市は石製品も有名であり、同市にゆかりのある四天王の石像を製作し、改修後の中央緑道に設置することとした。

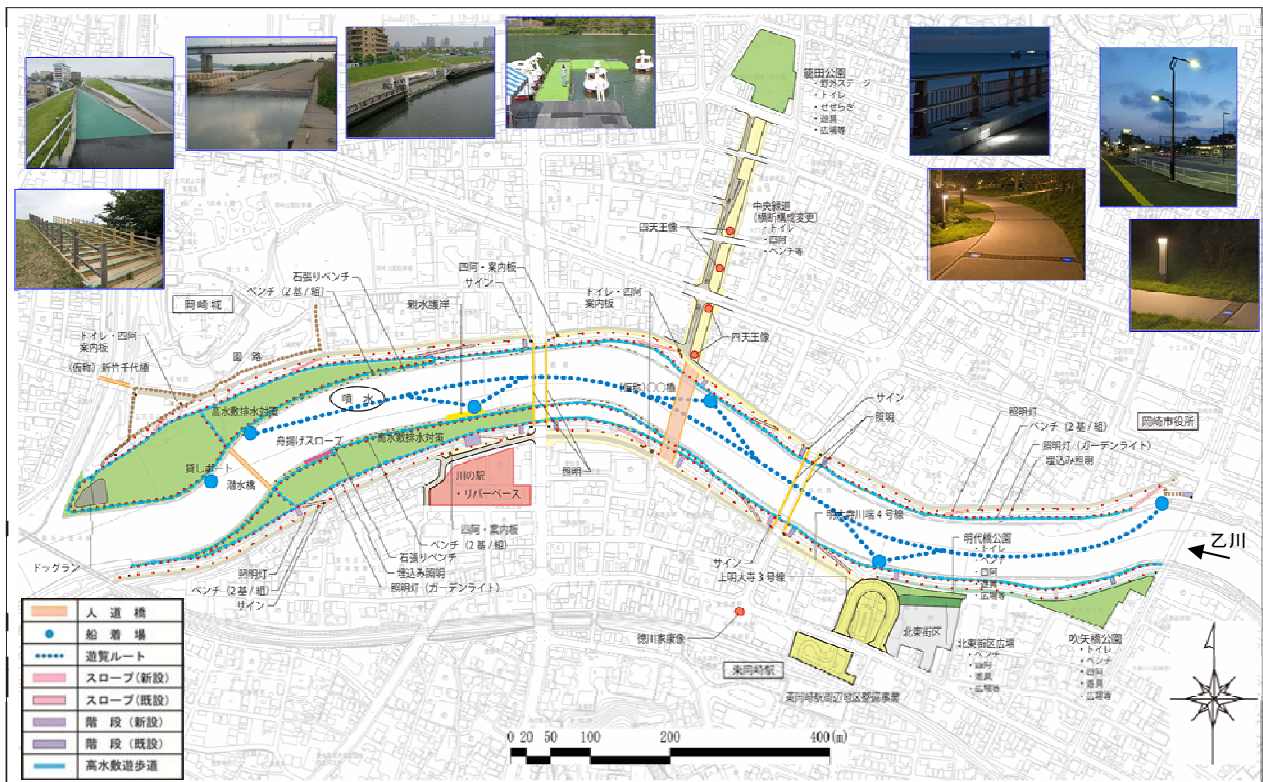


図-6 乙川リバーフロント地区整備方針概要図

### (3) 殿橋・明代橋

殿橋・明代橋は愛知県が管理する橋梁であるが、いずれも昭和初期に建造されたもので、特に殿橋は近代土木遺産((公財)土木学会)に選ばれている。現在、愛知県による長寿命化のための補修・修繕工事を実施中である。

今回、地区の整備にあたっては、両橋のライトアップを計画している。図-8に、殿橋のライトアップイメージを示す。ライトアップの基本色は人々を暖かく迎え入れ包み込む暖色系の「白熱色」としている。また、四季ごと、イベントごとに自由に色を変化させることができる仕様とした。



図-8 殿橋のライトアップイメージ

### (4) 川の駅・リバーベース

殿橋下流の左岸側には、市が保有する約7,900平方メートルの土地があり、ホテル・コンベンション機能とあわせ、物販・飲食施設や遊覧船・ボートの艇庫、シャワールームなどの川のアクティビティに利用できる「川の駅・リバーベース」施設の整備を想定している。

### (5) 照明計画・景観計画

現在、乙川周辺は照明が十分ではなく、夜間は暗い状況である。照明により岡崎のリビングとなるような優れた夜間景観を形成することを目指し、照明基本計画の作成を行った。

### (6) 岡崎公園

岡崎公園の河川沿いの道路は歩道が無く、人と車が交錯する箇所があり危険がともなうため、歩行者園路ルートを見直し、安全で安心して散歩等ができるように整備を進めることとした。



図-9 夜間景観イメージ

### (7) 河川空間

河川空間は今回の事業計画でメインとなる場所であり、市民や観光客が憩い、佇み、楽しめる魅力的な空間を創出するために、以下の項目の整備を実施するものとする。なお、一部実現性等について検討すべき項目も含まれる。

- ・ 河川へのアプローチ施設（スロープ、階段）
- ・ 沿川公園等（吹矢橋公園、明代公園、堤防園路）
- ・ 水面・水際の利用施設（遊覧船船着場、ボート乗り場、親水広場）
- ・ 修景施設（照明、噴水）
- ・ 高水敷の利用施設（遊歩道・ランニングコース、ドッグラン）
- ・ 基盤・利便施設（潜水橋、高水敷排水対策、ベンチ）



図-10 河川敷遊歩道のイメージ

### (8) 歩行者空間

歩行者空間として、乙川堤防道路を「乙川プロムナ

ード」として歩行者と車を分離し、安全な通行や佇みが可能な魅力的な空間整備を目指すこととした。舗装については、統一感のある御影石風の舗装とすることとした。



図-11 プロムナードのイメージ

## 6. 事業スキーム

本事業に関連する機関について整理する。

- ① 乙川の河川管理者は愛知県である。
- ② 河川区域の利活用に関する整備は岡崎市が実施を予定している。
- ③ 水辺利活用の実質的な推進主体として、民間を中心とした協議会・実行委員会を立ち上げる予定である。
- ④ オープンカフェや遊覧船など、事業を希望する民間事業者の存在が想定されている。

上記の通り、本事業の運営に関しては、主にこの四者によるスキームを構築することが必要である。平成 26 年度末時点の想定スキーム（素案）を図-12 に示す。

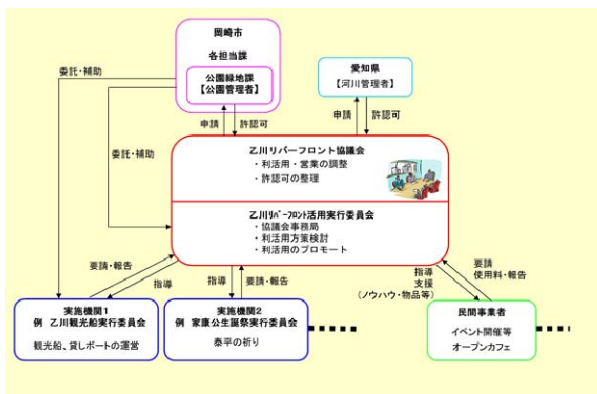


図-12 事業スキーム（素案）

本事業においては、オープンカフェや遊覧船、各種イベントなど、多彩な実施メニューが特徴的であり、その結果、様々な主体が関係することが想定される。また、地区全体の利活用に関しては、将来的には行政に頼らない自主的な運営が期待されている。平成 23 年の河川敷地占用許可準則の改正により民間事業者による水辺の利活用を推進している全国の先進事例の多くは、オープンカフェや川床など単一目的のものが多かったり、占有者と利用者が同一であったりするなど、全体として本事業で想定するスキームと同様のものはみられない。河川管理者との調整も含め、実運用に向けたスキームの構築が今後の検討課題と考えられる。

なお、河川区域で定期的にオープンカフェや遊覧船の営業を行うことを想定しているため、河川管理者である愛知県に対し、河川敷地占用許可準則の都市・地域再生等利用区域の指定について要望する予定である。

## 7. 今後の課題

平成 27 年 8 月時点では、社会資本整備総合交付金、「かわまちづくり」支援制度の内定・登録を受け、利活用の場作りとしてのハード整備の予算、体制面について準備が整いつつある状況である。今後は、各施設の詳細設計・施工及び利活用についての検討が必要となっている。

これまでオープンカフェなどが行われている先進事例では、掘込河川が多く、洪水のおそれがほとんどない箇所での事例が多い。一方で、乙川は年に数回洪水が起きる。右岸側は掘込となっているが、左岸側は堤防となっている。このような河川において、低水路、河川敷、堤防など河川区域の利用にあたっては、洪水時の対応についての検討が不可欠である。今後は河川敷地の占用手続きなどを通し、河川管理者である愛知県と調整を行い、それに基づいた各施設の設計、運用計画の検討が必要となる。

一方、本来の目的である水辺の賑わいづくりについては、市民や民間事業者が主体的に活動を行っていくことが望ましい。本事業計画については、計画段階から、民間組織の乙川リバーフロント部会などが検討に加わり、また市長自ら先頭に立ち市民対話集会を積極的に開催し、説明・意見交換を実施してきており、市民と連携した計画作成をすすめてきた。しかし、多くの市民や民間事業者が「主体的」に活動を実施する段階には至っていない。

平成 27 年度より、岡崎市はまちづくり関係の NPO

と協力して公開型ワークショップやフォーラムなどを開催するなど、まちづくり全体を盛り上げる活動を行っている。今後は、市民や民間企業と行政との連携がうまく調和することで、乙川周辺の水辺の魅力が増し、賑わいが取り戻されていくことが期待される。

#### ＜参考文献＞

- 1) 中安正晃：乙川リバーフロント地区の整備構想, 河川, 70 巻 第 11 号, pp. 40-45, 2014
- 2) 岡崎市:第6次岡崎市総合計画後期基本計画, 2015
- 3) 阿部充, 土屋信行, 野仲典理, 西嶋貴彦：岡崎市中心市街地における水辺を活かしたまちづくり, リバーフロント研究所報告, 2014